

令和元年6月10日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02399

研究課題名(和文) 個別から普遍へ 異文化現象としての中世ドイツ英雄叙事詩

研究課題名(英文) From the Individual to the Universal - Medieval German Heroic Epic as a Crosscultural Phenomenon

研究代表者

寺田 龍男 (TERADA, Tatsuo)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：30197800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世ドイツの英雄叙事詩をそれ自体で完結したジャンルとしてとらえるのではなく、中世日本の軍記物語との対比により、その特徴を把握することを目指した。その比較にはさまざまな可能性があるが、ここでは本文の流動性に重点を置いて考察を進めた。その結果、流動性がとくに高いディートリヒ叙事詩の諸作品については、日本文学研究で提唱された「流動志向本文」の概念による分析が有効であることを確認した。また写本伝承における本文の流動性が極めて高い年代記文学も対象として分析を進め、流動の原因に関するいくつかの知見と今後の課題を提起した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の欧米の英雄叙事詩研究では、『平家物語』などの軍記物語が同列に論じられることが少ない。しかし写本伝承におけるヴァリエーションの大きさなど、ジャンルの同質性とは別の次元で比較する可能性があり、しかも今後大きな発展が期待できる。本研究は、日本でほとんど知られていないものの中世ドイツ文学の重要なジャンルであるディートリヒ叙事詩や世界年代記をめぐる諸問題を解決するためには、日本文学の研究成果の応用に高い学術的意義があることを示した。

研究成果の概要(英文)：The focus of this research project was to investigate the medieval German heroic epic as a unique genre, but also to grasp its features in comparison with the Japanese medieval war chronicle. There are various possibilities for comparison, but in this project I have focused on the liquidity of the text. An analysis based on the concept of the "flow-oriented text" showed that Japanese literature research was effective for analyzing the works of Dietrich epic that were especially high in liquidity. I also analyzed the chronicle literature whose text is extremely fluid in manuscript tradition, and presented some findings on the causes of flow and concluded with an outlook toward future issues.

研究分野：ヨーロッパ系文学

キーワード：中世ドイツ文学 英雄叙事詩 ディートリヒ叙事詩 世界年代記 文学と歴史

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19, CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

報告者は、中世ドイツの「英雄叙事詩」という個別事象を異文化研究の対象としてとらえ直すことを目指していた。すなわち研究の方法論を欧米発の理論に依存してきた従来の受容型研究の成果を考慮しつつも、英雄叙事詩を文学のグローバルヒストリーに包括的に位置づける理論の構築を目指す。さらに、これまで顧みられることの少なかったこの分野で文献学的基础研究を遂行・発展させる。具体的には以下の3点を目標とした。(1) 英雄叙事詩を軍記物語と対比して主要な異同点を検証する。(2) その検証結果を基にして両ジャンル(「英雄文芸」と仮称)の特徴を体系的に抽出・理論化し、内外の研究者に新たな視点を提起する。(3) 報告者が遂行してきた英雄叙事詩諸作品の語彙研究をさらに進め、今後も校訂作業と構造分析に貢献する。具体的には、

- (1) 中世ドイツ文学の諸作品やその背景社会を異文化研究の立場でとらえなおす。報告者は日本における軍記物語の研究成果(口承文芸との関係・成立と書記伝承・文芸作品における社会の実相・紛争と調停など)を英雄叙事詩の研究に応用し、個別現象の研究を普遍へと広げる可能性を検討してきた。
- (2) ドイツで進む諸作品の校訂に資するため、あらゆる文献学研究の基礎となる語彙の研究を継続する。

報告者はディートリヒ叙事詩の諸作品につき、紙媒体の校訂版(19世紀のものを含む)を用いて写本間の語彙の比較研究を進めてきた。中世ドイツ文学における語彙の統計分析は、J. Bumke の業績を除くと、海外の研究者がまったく行っていない課題だったからである。従来の業績は、現在もブレイメン大グループが進めているディートリヒ叙事詩諸作品の校訂作業への貢献を意図したものであり、これらにより論文5篇がブレイメン大 E. Lienert 教授らにより刊行されたディートリヒ叙事詩の新たな校訂版(『ディートリヒの敗走』 Niemeyer 社 2003年・『ラヴェンナの戦い』同 2005年・『アルプハルトの死』同 2007年)で引用され、同じくブレイメン大 S. Kerth 博士の研究書(2008年)でも拙論3篇が引用された。

本申請研究はこれまでの助成研究のさらなる充実を期するものであった。ただ報告者の文献学的語彙研究については一定程度の認知を受けたものの、日本文学との比較と対比に関しては、なお検討すべきであるという指摘を得ていた。これは正しい批判であると認めなければならない。また日独間の比較だけでなく文芸作品の普遍性を考えるのであれば、日下力が示したように(「戦いの面白さ—世界文学のなかで考える—」『中世文学』59, 2014)、考察の対象を可能な限り広げる必要がある。

以上が研究開始当初の状況であった。

### 2. 研究の目的

- (1) 「個別から普遍」という理論を提起する前提として、英雄叙事詩と軍記物語の位相をドイツ文学と日本文学全体の中で実証的に考察して論拠を示す。本研究では、現在もっとも大きな貢献が期待できると思われるいくつかの点(口承文芸との関係・成立と書記伝承・文芸作品における社会の実相・紛争と調停など)に取り組み、対比の新たな可能性を示す。
- (2) 写本伝承における本文の流動性の高さは、ディートリヒ叙事詩諸作品の研究を一面では困難に陥れているが、見方を変えると、この点で厚い蓄積がある日本文学の研究成果を応用して諸問題に取り組む可能性があるともいえる。報告者が従来行ってきた語彙研究の範囲をさらに拡大し、「語彙」から「本文」のレベルに引き上げた上で、引き続き当該ジャンルの諸作品それぞれにおける写本伝承の特徴を明らかにする。
- (3) 日本では、多くの歴史学者が軍記物語をはじめとする文芸作品に史料としての性格を認めている。従来から文学と歴史学の垣根が高いヨーロッパの学界と比べると状況は異なるが、文芸作品にも史料側面があることは、今日では歴史学者 G. Althoff ら多くの研究者が認めている。これらの課題を解明するには、本来日下が指摘したように世界文学の枠で考察しなければならないが、すべてに目配りをするのが困難であるともいわなくてはならない。そこでまず実証的な研究を行うため、日本文学および日本史学の研究成果から学びつつ、個別現象としての中世ドイツ文学と日本文学から共通性を導き出し、さらに普遍性を追及する方法を考察してその序論を提示する。

### 3. 研究の方法

- (1) 英雄叙事詩をドイツ文学の枠だけでなく、「英雄文芸」(仮称)のひとつとして相対的に考察する。そのためいくつかの重要な点について比較を行う。具体的には、英雄叙事詩の作品内の描写だけでなく写本の成立や伝承状況などについて、関連諸学の成果を援用して特徴を抽出する。これは「個別」事象の全体像を実証的に明らかにする作業である。

英雄叙事詩を異なる文化圏（ここでは日本）の対応しうるジャンルと比較検討し、「普遍」的な構成原理や成立条件は何であるかを考察し、その結果を示す。

ディートリヒ叙事詩の諸作品における語彙の使用傾向を分析する作業をさらに進める。これらにおける様々な語彙の分布に関しては、申請者の従来の研究によりデータ収録をほぼ終えており、分析と特徴の検証を進めてきた。これによりブレーメン大のグループが校訂作業を進めている『ヴィルギナル』の新版について、引き続き貢献する。またこれまでの研究で公表した成果を（正確を期するため）再検証しつつ、他の作品の特徴を写本レベルでも明らかにし、英雄叙事詩に共通する傾向と個別的な性格を記述する。

- (2) ディートリヒ叙事詩の写本伝承では本文の流動性が高い。そこで同じ傾向をもつハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』の本文異同の性格についても調査を進め、ディートリヒ叙事詩諸作品における異同のあり方を考える材料とする。
- (3) 上記以外でも、英雄叙事詩と軍記物語で比較が可能なテーマについて考察する。たとえば文芸一般で重要なテーマの一つである「恋愛」は東西どちらの英雄文芸にも見られる。包括的理論を構築するため、できるだけ多くのテーマと事例を集めて比較考察する。

#### 4. 研究成果

本研究は論文 9 篇と口頭発表 2 件をもたらした。以下はそれらの概略である。

- (1) 英雄叙事詩という個別現象を「英雄文芸」という普遍現象の中に位置づける研究

いくさをテーマとする作品がもつ残酷・理不尽な描写ゆえ、欧米の研究者の中には中世ドイツの英雄叙事詩を代表する作品『ニーベルンゲンの歌』を「ゲルマン的」とみなす傾向がある。しかしそれはけっして作品やジャンルに固有の傾向なのではないことを示し、あくまでヨーロッパ中世の物語一般の枠内でとらえるべきであると提言した（論文 ）。英雄叙事詩の諸作品では、上述のように写本ごとに本文の異同が大きい。そこで次に、各作品それぞれの特徴を描写すると同時に、ジャンルの特性の一端（「語り始め方」）を分析する作業を行い、各作品それぞれの共通点と相違点を明らかにした（論文 ）。また『ディートリヒの敗走』の最初の約 2500 行は、完本 4 写本のうち成立年代が早い写本 P と W よりも、はるかに遅く書かれた写本 P と A が古態を残す。そのため従来は写本 P と A の冒頭部分も原態ないしそれに近い形態を残すと認識されていた。この通説を批判し、作品の冒頭部分は改変される例が多いことから『ディートリヒの敗走』の残存写本でも変容を被ったことを前提とすべきであると論じた（論文 ）。これらにより、ディートリヒ叙事詩そのものおよびその性格について、部分的ながら包括的な記述を行うことができた。さらにブレーメン大グループが 2017 年に刊行したディートリヒ叙事詩『ヴィルギナル・ゴルデマール』に学び、主要 3 写本の違いと編者の校訂の原則を論じた。『ヴィルギナル』にはいわゆる正本とみなすべき写本がなく、校訂に難しい問題がある。まさにそれゆえに、日本文学研究と比較対照する意義があると判断し、ブレーメン大グループの校訂方法を詳細に論じた（論文 ）。（なお同書には拙論 5 篇が引用された。）これらの成果により、日本文学研究者にも本文流動に関する議論のための問題提起をすることができた。

- (2) 本文の流動性に関する研究

『ディートリヒの敗走』の記述の一部が 2 写本に引用されているハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』は、書記伝承における本文の流動性がきわめて高い。そこでこの年代記の引用箇所と典拠である『ディートリヒの敗走』本文を比較し、本文の変化のあり方を具体的に示した（論文 ）。さらに『世界年代記』という作品そのものを詳細に紹介し、併せて本文の流動の実態を記述し、本文の流動がどのようにして起きているかも明らかにした。年代記文学の研究はドイツ語圏でも進んでいないが、そこに日本文学の研究成果を応用できる可能性がけっして小さくないことを提起した（論文 ）。なお『世界年代記』本文については記述の出典が精査されているが、写字生が個々の典拠をどう処理したかまで踏み込んだ論は少ない。そこで 1 写本の冒頭部を選び、いかなる改変が行われたか（あるいは行われなかったか）を記述し、写字生の姿勢を明らかにした（論文 ）。これらにより、日本文学研究で小西甚一により提唱された「流動志向本文」概念を西洋文学に応用する作業を開始した。

- (3) 日独の英雄文芸に共通するいくつかのテーマ等についての研究

英雄叙事詩では通常戦争や戦闘が主要なテーマである。しかし他の文化圏の関連ジャンル（たとえば日本の軍記物語）と同様、登場人物の恋愛や婚姻もしばしば作品内でテーマ化されたり言及や暗示がなされている。ただし、恋愛は洋の東西を問わず文芸作品の主要なテーマであるため、英雄叙事詩から恋愛や婚姻に関する場面のみを取り出す分析は有効ではない。そこで基礎的な作業として、日独の恋愛詩、とりわけ「後朝の歌」(dawn songs) に関する対比研究を試みた。このジャンルは文学のグローバルヒストリーできわめて重要な位置を占めるからである（論文 ）。2017 年には岡崎忠弘（訳）『ニーベルンゲンの歌』が刊行された。書評を書く機会を与えられたので、訳業の意義の大きさなどを論じた（論文 ）。ブレーメン大で資料調査と意見交換をした際に口頭発表を行う機会を与えられたため、『ニーベルンゲンの歌』が戦前の日

本でどのように受容されたかを発表した(2017年6月21日)。初めての翻訳が1939年に刊行されたにもかかわらず、作品の名前自体ははるかに早く知られており盛んに論じられていたという特異な現象を指摘し、その背景事情(「脱亜入欧」に象徴されるナショナリズムの高まり)を分析した。この発表の原稿を補足して論文としても刊行した(論文)。

助成期間内に発表した論文のうち8篇は機関リポジトリで公開されており、ダウンロード数が逐次報告されるので、データを最後に挙げておく。2019年6月1日現在での被ダウンロード数は以下の通りである。論文 90回、論文 128回、論文 213回、論文 180回、論文 385回、論文 909回、論文 1054回、論文 964回。なお遺憾ながら、「研究の目的」および「研究の方法」でふれたものの助成期間内では成果の刊行に至らなかったテーマがある。それらについては、今後順次発表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計9件)

寺田龍男, ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』(2) 中世後期ドイツの写字生が典拠と取り組む姿勢, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 査読無, 133号, 2018年, 41-57

DOI: 10.14943/b.edu.133.41

Tatsuo Terada, Das Nibelungenlied in Japan bis 1945 – eine Pseudorezeption?, 独語独文学研究年報, 査読有, 44号, 2018年, 159-172

URI: <http://hdl.handle.net/2115/70510>

寺田龍男, ハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』 研究の現状と課題, メディア・コミュニケーション研究, 査読有, 71号, 2018年, 111-142

URI: <http://hdl.handle.net/2115/68787>

寺田龍男, 『ヴィルギナル』研究の歴史・現状・課題 プレーメン版の刊行に寄せて, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 査読無, 129号, 2017年, 115-134

DOI: 10.14943/b.edu.129.115

寺田龍男, 書評: 岡崎忠弘(訳)『ニーベルンゲンの歌』鳥影社2017年, 図書新聞, 査読無, 3316号, 5-5

寺田龍男, 多文化理解論の実践 東西後朝考, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 査読無, 127号, 2016年, 1-8

DOI: 10.14943/b.edu.127.1

寺田龍男, 『ディートリヒの敗走』からハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』へ 主人公の「祖先の系譜」について, メディア・コミュニケーション研究, 査読有, 42号, 2016年, 1-23

URI: <http://hdl.handle.net/2115/61102>

寺田龍男, ディートリヒ叙事詩の語り出し 『ディートリヒの敗走』の構造考察のために, メディア・コミュニケーション研究, 査読有, 69号, 2016年, 99-116

URI: <http://hdl.handle.net/2115/68787>

寺田龍男, 『ニーベルンゲンの歌』はゲルマン的か, 国際広報メディア・観光学ジャーナル, 査読無, 21号, 2015年, 22-33

URI: <http://hdl.handle.net/2115/59857>

[学会発表](計2件)

Tatsuo Terada, Das Nibelungenlied in Japan bis 1945 – eine Pseudorezeption?, 2017年6月21日プレーメン大学 Fachbereich 10 (招待講演)

寺田龍男, 『ディートリヒの敗走』とハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』について, 2015年12月12日北海道大学(北海道ドイツ文学会第80回研究発表会)

## 6. 研究組織

### (2)研究協力者

ヘルガルト エルンスト (HELLGARDT Ernst)  
ミュンヘン大学名誉教授

ヴンダーレ エリーザベト (WUNDERLE Elisabeth)  
バイエルン州立図書館主任研究員

ケアト ゴーニャ (KERTH Sonja)  
プレーメン大学言語文学研究科私講師

岡崎 忠弘 (OKAZAKI Tadahiro)  
広島大学名誉教授

南部 昇 (NANBU Noboru)  
北海道大学名誉教授

後藤 康文 (GOTO Yasufumi)  
北海道大学大学院文学研究院教授

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。